

山本一清博士とあなない天文台（その2）

公益財団法人 国際文化交友会
月光天文台 五味政美

1. はじめに

山本博士と三五（あなない）教中野與之助開祖との出会いは、第5回天文台アーカイブプロジェクト報告会集録に掲載されています。

中野開祖が1956年10月（昭和31年）に山本天文台を訪問してより、2ヶ月後には三五教に在勤となり、3ヶ月後には中央天文台長に任命されました。

そもそも、何が山本博士を決断させ、これから各地に10ヶ所もの天文台を建設し天文普及活動に奮い立たせたのか。その一番の影響は、中野與之助開祖の人智を超越したスケールの大きさではないでしょうか。写真①のように「至大天球一呑」を見て、山本博士は「ウ——ン」と言って、じっと見ながら長く立ち止まったままであったと聞いています。

もう一つは、天文学が観測中心の実証を中心になり、昔ながらの精神的な、あるいは哲学的な面が気薄になるのを憂いていた頃に中野與之助開祖によって「宗教と天文は一如」などを見聞きして、博士の気持ちがが一変したのではないかと推し量るのみです。

また、中央天文台が月光天文台に、西部天文台が九州天文台へと1～2ヶ月半で改称されましたが、その意味も伝わっていません。

最近、1954年（昭和29年）秋に、「月光」と揮毫されていたものが見つかりました。

月光天文台の命名には、夜空に輝く月の光のように、世の中に光り輝く天文台であってほしいという願いがあったのではないかと私なりに思えてならないのです。



写真① あなない誌1957年(S32)1月 写真② 1970年(S45)

2. 中野與之助開祖と山本一清博士の対談

1957年1月24日の夜、三五教総本部光照館会議室で中野開祖と、近く建設に着手する三五教中央天文台の台長山本一清博士の対談会が催された。

開祖「星の中には、何億光年もかゝって、やっと、その光が地上に達するような、想像を絶した遠距離のものが、太陽、木星、金星、土星などは元より地球に一番近い月でさえ、この地球からは何万里も隔っているそうですが、その長大な距離をはっきり測定した科学の力は実に偉いものだと思います。何となれば、地球との間に五十万里の距離を持つ星は、その前後左右、上下にある夫々の星とも遠大な距離を持っているはずで、地球と天体との間の距離がはっきりしているということは、取も直さず宇宙の広大無辺なる様を如実に且つ体的に知らしめることである。抽象的にただ広大であるというのではなく、それを数に現わして教えているということの意義は大きい。この点にお

いて科学者が天体と天体との間、また、天体と地球との間の距離を、正確な数をもって示してくれているのは、実に偉いことだと思うのですが如何ですか」

山本「天文学では、最初、目に見える星だけを対象にして、その距離を計っていたのですが、研究が進むに従い、遠い近いの関係だけではなく、星を遠く離しているものは何かということを考えるようになりました。それで今から百年ほど前に、天文学者は無論のこと、物理学者や数学者の間においても、星を何が遠く見せているかということが問題になって来ました。それで、色々とそれに関する論文も提出され、観測研究に必要な立派な機械もでき、観測の実験も行われて来ま



写真③1957年1月6日沼津市神聖館
右より中野開祖と山本夫妻

した。最近、そうした問題に対し、最も面白い解決法を考え出したのがアインシュタイン博士です。彼は五十年ほど前から星と地球間の遠近ではなく、どうして遠く見えるか、また、どうすれば正確に星を計り得るかという根本的な研究を続け、遠い近いは我々の頭で判断する都合によって定められているのである。絶対的に遠いとか、絶対的に近いとかいうことはないといって、学界にセンセーションを起しました。学者は元より一般の人々も彼のこの言葉には、びっくりしたのです。

明治三十八年、この年はあらゆる意味において大事な年ですが、この年に彼は右に関する論文を発表しまして、宇宙研究のやり方の根本問題を解決したのです。これが有名な相対性原理です。これによれば、時間の遠さも絶対的なものではなく、人間の頭の都合によって定められているのである。見たい、聞きたいという人間の都合により、ずっと大昔にもって行ったり、近くしたり、過去になったり、未来になったりしているのだというのです。

これだけでは言葉が簡単過ぎて意を尽しませんが、とにかく相対性原理は、星のあり方、観測のしかたにまでおよびました。だが、彼が、これは、こういう風に観測すればこうなるということをはっきりいったのは、十年後の大正四年です。

そこで天文学者は、果してアインシュタインがいうようになるかどうかを調べてみようとして、大正八年にアフリカの西部で日蝕のあった時に、争ってこれが観測に努めました。当時、英国では、敵国のドイツに対する戦争の時の反感から、ドイツ人であるアインシュタインを白い目でにらむ者が多く、さらに、もしアインシュタインの新原理が正しいとなれば、英国の誇りであり、宝のように思っているニュートンの学説がくつがえされるというので、この日蝕観測参加に反対する声が高かったのです。

でも、英国学者たちは、純学者的な立場からこうした反対を押し切り二組の観測隊を組織してこれに参加しました。この中には、私の敬愛し、尊敬する故エジントン博士も入っていたわけです。

この観測の結果により、アインシュタインの原理の正しいということが世界的に認

められました。これは、実に、何十年に亘るこの問題に、はっきりとした証明を与えたものであります。そして、宇宙はこのようにして見なくてはならぬという宇宙の見方の根本方針を確立しました。これは取りも直さず、宇宙間に、目に見えず、触れることもできぬ霊的なものゝ存在を発見したのであるともいえましょう。それまでは、この空間には目には見えぬが、エーテルというものがあると考え、何とかして、これを掴もうと思って、百年も、二百年も研究していたのです。ところが、アインシュタインはエーテルの存在を否定しました。そして、そのことはアインシュタインによって証明され、望遠鏡にも現われたのであります。

要するに、距離とか時間とかは、我々から離れて存在するものではなく、我々のうちなる精神の中にあるという結論が出て来たわけです」

開祖「科学が、そこまで進んで来たことを承って、実に、喜ばしい、アインシュタインの考えたこと、いったことには感心するのほかにありません。

だが、流石のアインシュタインも宇宙間のすべての問題を解決することができなかった。これは、あらゆることを体的な考えによって解決しようとしたからです。宇宙万物はすべて霊によって成っている。故に、わが精神に霊力をおさむれば、相手も霊力によってできているのであるから、すべてのことが手もなく解決します。

霊力が如何なるものであるかは、霊の把握、すなわち、神の精神をわが肉体へ収めることによって、これを知ることができる。神の説明であろうが、科学の説明であろうが、皆、霊の説明の一部分に過ぎないのです。

只今、承るところによれば、科学は、すでに宗教家がいわんとするところの隣まで来ていることがわかる。も早、かく相成っては、これまで、いわずに押さえて来たことも吐き出さなくてはならなくなりました。今や、その時期が到来したのです。私は先生のお話で、かくなることを知り、とても嬉しく思うのであります」

山本「アインシュタイン博士は、計り知れぬ偉い学者なのに、ユダヤ人なるが故に、心なき人々から排斥され、受けなくてもよい苦しみを受けられたのは、ほんとうにお気の毒です。彼は実に偉かったが、人間ですから、知と力に限界があつて、遂に宇宙の謎を解く今一つの大きな問題を解決せずに逝かれました。

彼は電気と引力との調和を計ろうとしていたのです。もし、これができていたら、科学的分野における宇宙の根本問題はすべて解決していたといってもよいほどのものです。

今のところ電気と引力とは別にして考えられているが、彼は、この二者は別物ではないと信じて研究していたのです。

陰電気と陽電気とが相引き合っていることは、何十年も前からわかっていました。太陽も月も地球も互に引張り合っている。例えばこの机にしても、机自体が電気を持たぬ場合には、太陽から引張られ、地球から引張られるという力だけしか現わさぬはずで

す。

ところが、もし、机が電気を持っているとすると、その電気が引合うか排斥するか、何れにしても電気的作用が起っているはずなのです。彼は、この問題の研究に最後まで努力しましたが、遂にそれを解決し得ないで逝去しました。

これは神にあらざれば解決し得ないほどの難問題であると同時に、現代人に課せられた、大きな問題です」

開祖「その宇宙の謎を解くには、先ず、宇宙の身魂が人間であるということを知るべきです。人間が精神的に成長して大きくなれば、宇宙も、それに従って際限なく大きくなります。

先生のいまのお言葉を精神的に説くと、電気と引力の関係は、天の靈氣と地の靈氣の関係から解決することができると思います。天がなければ地に靈氣なく、地がなければ天の靈氣は起りません。この天地の靈氣が相合して働いたところから、人類万物が生れ、それによって生存し続けているのです。換言すれば、宇宙は靈力の力によって生きているのです。陰陽はもともと一体のものであり、靈の働きをきわむればそのことがよくわかるのであります。これがわからぬと、天文と宗教とが一つであるという言葉も理解できぬのであります。

天文学は精神的な面に接近して、宗教と紙一重のところまで来ている。宗教は精神的に宇宙実体を極めてその極徳*2と合致しようとしているのに対し、天文学は体的に宇宙をきわめようとしている。

今や、天文学をよそにしては体的に宇宙の実体を判らせてくれるものはないのであります。故に天文学は体的宗教であるということが出来ます。

太陽は科学的にはガス体と見ているそうですが、宗教的に見れば、太陽は精神的な至高なる存在であります。しかし、これを如何に微細に説いても、精神的な話には物的証拠がないから、理窟の多い大衆が容易に納得致しません。

そこへ行くと、科学者の話は物的証拠があるから大衆が直ぐに納得する。殊に先生のような天下の碩学が、天文を説いて、宇宙の実体が如何なるものであるかを体的に知らしめ、体的な面から宗教への目を開いて下さるのは、まことに有難いことです。時に『海水が塩からい』ことについて科学者はどう見ているのですか」

山本「その問題は十九世紀の終りに一応解決しています。海水の塩分は地球が『生きて』働いているところから出ているのです。

地球は単なる土くれでない。生きて、長い間に様々な仕事をして来ました。その一つの現われが、海水の塩からい味つけです。あの味を計り、味の度数から、地球がどれくらいの年月を経て来たかを知り、その寿命を推測することができます。これは頗る稀薄なものを対象にした研究ですが、それによって海水の塩からさから地球の年令を計算することができているのです」

開祖「精神界から見た宇宙は天地を一体とした生きものです。だから地中にも、熱もあれば水もある。この二つが地中で循環している。従って、そこに住む人間の肉体に流動する血も赤く純化して来るものなのです。

地中の熱と水が作用し合って塩分を作り上げているのですが、これは、うんと大量にできて来るものであって、自然の力で海水の中へ流れ込んでいます。こうした点では、精神的見解も体的研究の結果も一つのところに落ち合っている。ただ体的の方には色々と名がついているので話しよいが、精神的の方には名がないから、はっきりとわかっていることでも、話しようがないので苦労します。

塩しほのシとは塩分を含んだ水のことで、ホとは火の炎のことです。海水中のからいものをシホと呼んでいるのは、まことに、いみ深いことで、人が名づけたというよりは、何かにそういわされたと見るのが至当でしょう。シホのできるのは水と炎の活動によるものであると認めると、それは、もう靈界の事柄になって参ります。

いま、こうして話合っているのも靈界から見れば、靈的なものに繰られて話させられ

ているのだということがわかります。日頃私のしている日月星辰の説明は、日月星辰を通しての霊の説明です。天地間一切のことは霊という精神的なものが動かしているのであって、霊さへわかれば、宇宙間のあらゆる問題が解決されるはずのものです。

そして、宇宙に通ずるほどの精神をわが精神におさめた場合には、霊が大きくなり、精神も大きくなる。依って人間が、もっと精神的に向上更生すれば、あらゆることがわかるようにできているのであります」

山本「一寸話が脱線しますが、二、三日前の新聞に、今日最大の話題になっているわが南極探險隊と本国との間に電波が通じないのが、その原因がわからぬとの記事が出ていました。これは太陽の黒点が大きくなって、電波の妨害をしたからのことであって、別に不思議とするには足らぬ事柄なのです」

開祖「今日、ある学校の校長先生に会いましたが、その校長先生は、今年はいへん天文界に変動のある年だから、ぜひ学生たちに天文に対する理解を持たせておきたいといっていました。

星は、宇宙の循環順律のことを知らしめるものである。天体に異変あることを天変と呼び、人の思想の変ることを地変というのである。かようなところから考えると、一つの時期を経過することによって全大宇宙が、より以上に大きくなることがわかんと思います。人類の精神力が大きくなれば、宇宙も、それだけ大きくなるので、人類の霊的な力が、もっと、もっと体的、精神的に備わって来れば、高山や、極地の空気の稀薄なところへ、物の力を借らずして、空気を持って行くことも可能になって来るはずで、空気は人間には、つきものなのですからねえ、如何でしょう。外国には、こうしたことのわかっている人があるでしょうか」

山本「さあ、ありますか、少なくとも天文や物理や地文をやっている人にはありませんね、やはり人間智識だけに頼っていますからね。昨夜こちらの月次祭に参列して、御神前の中央あたりを、じっと、見つめていると、何ともいえぬ神々しい感じが起って来ました。深夜独り静かに星を見ていると、これと同じような神々しさに打たれて、心の清まる思が致します」

開祖「天界の星をじっと見詰めて、その星にわが身魂が通じた場合には音が聞えて来るはずで、星を見て、その星から流れて来る音に耳をすましていると、その星が何を語っているかを聞くことができる、無論、霊耳によってですがね、星を見れば、星の一つ一つが皆何事かを語って下さる。この星の声は星の振動によって起るものだと思います。天地、人類、万物は悉く生きものであって、日に働いて生活して行く、そして、それが榮えとなるのです。かくして人類万物が宇宙と共に榮え行くことが神のお仕組であり、お思召しであります。すべての精神的な事柄は霊の働きによるものです、人類はこの働きを天地に、うつし広めて、天地と共に活動して行かなければならぬのです。また、あらゆる働きの中には精神があるのであって、すべてのものが霊によって働かせられているのだと見ることもできるのであります」

会長*1「どうも有難うございました、ではこのへんで」

*1 三五教会長、根上信

*2 極徳 写真④ 中野開祖の最後の揮毫（意味はこの文章以外にもあります）



写真④1974年(S49)



写真⑤ 1957年(S32)沼津市我入道海岸の山本夫妻
(月光天文台の木材加工所近く)

3. 宇宙天文博覧会

1959年（昭和34年）4月10日午前10時皇太子殿下と美智子妃殿下のご成婚の儀式が執り行われました。ご成婚を記念して同日、同時刻より5月31日迄、月光天文台と九州天文台で写真⑥のポスターにある宇宙天文博覧会を開催しました。

山本台長亡き後に、山本博士の薫陶を受けた台員を中心に、世界の天文台紹介会場、太陽系会場、星座会場を設け、天文台の中に、宇宙旅行センターとして、人工衛星、ロケット、月面基地を模し、天文の役割と、宇宙開発について広く伝えたのです。写真⑦⑧参照

また、広く会員を募集して、国際的な教育文化を促進するために1957年（昭和32年）国際天文会を経て国際天文協会を発足した。1961年（昭和36年）に財団法人国際文化交友会の認可を得、2011年（平成23年）公益財団法人国際文化交友会へと移行しています。



写真⑥天文博ポスター



写真⑧月面基地



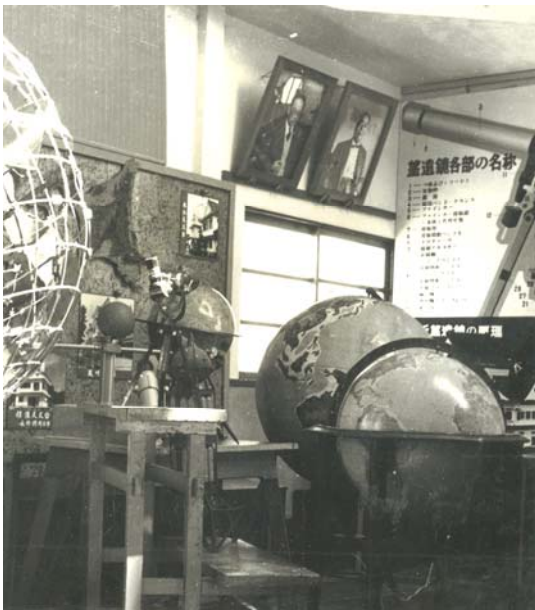
写真⑦ロケット館内

4. むすび

山本博士が台長室（写真⑨）を出でてより僅か2ヶ月余りで急逝されるとは、誰しもが思わなかったのです。在籍中は病状を誰にも気付かれないようにしておられたものかと思われます。

初代台長として天文台活動の重要性を各地で講演され、若い台員の養成にも尽力されました。一般大衆に対し、天文学の解説書を著作され、アマチュア天文家養成のパイオニアでもありました。

月光天文台では、宇宙天文博覧会の時より、天文台3階の一角に写真⑩のように初代山本台長と創設者中野翁の写真が1973年（昭和48年）6月まで掲げられていました。多数の見学者がこの写真の前に立ち山本博士に触れ得たものと思います。



写真⑩天文台3階



写真⑨台長室